

白金 葵



SHIROGANE YOSHI



コンバイン地の鶴空の鶴連れて（2025/9/24 手賀沼干拓田）



風船葛の返り花（10.17） 紅白曼殊沙華（9.30 将門神社）

どんぐりと言ふ名愛して拾ひけり
引きとめし人送りゆく十三夜
草の絮跳ぶや展墓の旅にあり
ひぐらしや厨に茹でる青きもの

璃子（穴まどひ平21） 高志選
〃（〃）〃
〃（〃）〃 みち選
〃（〃）〃

令和7年（2025）

10月号

168号

定例句会（11月の兼題・切干、小春）

十一月二十一日（金）アビスター第五学習室 12時

十二月十九日（金）アビスター第三会議室 12時

一月十六日（金）アビスター第三会議室 12時

十月句会（'25 10月17日 兼題 菊、身に入る）太字は当日句

新米の山をならして量りおり
渋皮煮傷つけぬよう栗を剥く

金木犀香りに気づく朝の庭
もう五歳成長祝う七五三

佐々木由紀子

名月

十一月二十一日（金）アビスター第五学習室 12時

十二月十九日（金）アビスター第三会議室 12時

一月十六日（金）アビスター第三会議室 12時

十月句会（'25 10月17日 兼題 菊、身に入る）太字は当日句

光成高志

名月や流るゝ雲を仄紅く

みつばあけび青葉の絡み密にして

コンバイン地の鷺空の鷺連れて

もたもたと身に入む歩き宵の道

修善寺の燈の両脇菊の鉢

遠近ちちに泡立草の黄の割拠

光みち

いつの間に白雲消へて菊日和

身にしむや手摺掴んでポストまで

身にしむや隣の人の大嚏

萩トンネル日陰細やか明るけれ

秋の日や鴨の逆立ち繰り返す

踏んづけて毬栗を剥ぐ快いよし

浅野正美

新しき塔婆供えて菊供ふ

身に入むや施設入所の友ありて

山下寿幸

2

168号選句一覧 ○字は選者の頭文字。
壽(山下寿幸)名月や流るゝ雲を仄紅く

名月と流れる雲の描写が綺麗だ。仄の表現がとても良い。

富特選

苗木植え大輪の花菊つくり

毒亞あぜ道に楚々と咲いてる野菊かな

秋日和に田んぼの周りを散歩していると楚々と咲いている菊も香りに魅せられた情景がします。

清新しき塔婆供えて菊供ふ

新しき塔婆に菊を供える。今年故人になられた方の塔婆であろう。

毒いつの間に白雪消へて菊日和

散歩中一休みして空を見上げれば雲一つない菊日和だった風景が見えてきます。

もう五歳成長祝う七五三

亞みづばあけび青葉の絡み密にして

由正銀杏実探見つけて虫の声

菊の花花壇に咲いて凜として

由の高身に入むや施設入所の友ありて

身にしむや手摺掴んでポストまで

香りする角曲があれば金木犀

毒のコンバイン地の鶯空の警運れて

秋空に稻刈りするコンバインの後ろに驚いてくる様子が目に見えます。

秋日和手元の刃ナイフ鳥つくり

由正野の道に香り届ける菊の花

由の高新米の山をならして量りおり

身にしむや隣の人の大嘆

遠近をうちに泡立草の黄の割拠

由正のもたもたと身に入る歩き宵の道
風庵にバードカービング樂しけり

由の高食卓に香り届ける菊の花

食卓に花が有ればいいのだが今日は香りのする菊を食卓に添えさせて

囲んで楽しく食事している情景です。

毒の洗皮煮傷つけぬよう栗を剥く

秋の食卓にいつも楽しみな寒い飯。洗皮を剥ぐのに大変だが煮詰めることで綺麗に皮が剥けた様子。

高秋トソネル日陰細やか明るけれ

高踏んづけて毬栗を剥く快し

修善寺の燈の両脇菊の鉢

由身に入て柿の実下がり西の空

の野辺に咲く菊の香かほる朝の道

毒の高金木犀香りに気づく朝の庭

我が家庭の庭を見れば金木犀の香りに気が付き良く眺めている様子。

由秋の日や鴨の逆立ち繰り返す

高身にしむや友のやさしさ常のこと

俳窓評論纂

* 8.10 朝日俳壇 戦禍の光 中村草田男の昭和19年の作。「学兵汝なれ吾が仰ぎ目に息白き」「冬日見詰

めて涙を支ふ下瞼したまぶた」。草田男が成蹊高校の教え子を戦場に送り出すことになつた際の句だ。息白きは

冬の季語。写生がこまやかで作者の情の熱さが伝わってくる。

「勇氣こそ地の星なれや梅真白」は出陣近き教え子に

示した同年の句。「地の星」とは聖書マタイ伝に載る語。塩は防腐剤として人の世の腐敗堕落を防ぐものという比喩に託し、戦禍でも自暴自棄にならず、勇気・気力を持つて生きよという意を暗黙裡に込めていた。梅真白がよく効いている。白梅の凛とした姿は、困難の中でも生きる光明である。地の星が私は長い間分からなかつたが、この記事にて了解した。草田男はクリスチヤンなのだ。「街の灯の消えハルキウの星月夜」「地下壕に紙飛行機や子らの春」。ウクライナの俳人ウラジオスラバ・シノバさんの句。彼が病気療養中に知った芭蕉に希望の光を感じ、句を詠み始めた。ロシアの侵攻後は、戦時下で生きる人々の心の襞ひだを伝えようと作句を続ける。暗闇の街の満天の星、地下壕の子どもの姿には生きる強さと一縷いちるの光がある。その言葉が誰かの生きる力、希望の光となることを願い俳人は詠み続けるのだ(俳人市村栄理)。この人病気療養中に芭蕉を知つて希望の光を感じたのだ。私はもう何十年も芭蕉々々と言つていますが、キリストが地の星と世の光を山上の垂訓^{説教}としてのべたのであるが、病人にとつては芭蕉が希望の光・世の光に思えるのだ。

8.10 朝日俳壇高山れおな選の「古里や誰も居ないが蝉が鳴く」(長岡京市 寺嶋三郎)の句に同感。²⁴の権選の「向日葵が我に語れと立ち並ぶ」(守谷市 久保田洋二)も擬人法だが、同感。同、大串章選「炎天を透析

に通ふいのちあり」(川口市 渡辺栄治)万世遊さんを思つた。9.7 権選「あつけなく昼夜の人となりにけり」(金沢市 岩本卓夫) 83歳の人。この境地も悪くないの選評。私と同い年。^{9.21}の高山れおな選「言の葉はみな過去のもの星流る」(上越市 相川澄子) 千年前の皿や茶碗はあくまで保存や鑑賞の対象となる文化財だが、言葉は普通に実用品だ。思えば凄い事。の選評。言葉は発せられた瞬間過去となりもう今の今ないもの、ぱつと流れ見えなくなる流れ星と同じだという時間軸で把握したもので、選者の評は的を外している。^{9.28}「音のみの波また波の去年今年」(澤好摩) 近刊の『澤好摩俳句集成』(ふらんす堂) 所収の句集未収句。誰も見ることのない海面の「波また波」。厳肅な新年の情景を暗澹と、しかも平易な言葉で描いたこの句は二〇二二年の発表。澤は翌二三年、旅先での転倒のため七十九歳で急逝した。前衛的な作風で知られる高柳重信の高弟と目される澤の句は、しばしば伝統的な作品と見紛うようでありながら、「自らの俳句の言葉をどこまでも自らのものにしようとしての、入念な彫琢」(高山れおな)が施されている。「春の暮赤し橋桁残りたる」(好摩)。夕焼けかもしれないが、赤く塗り潰したような「春の暮」を背景に、朽廃した橋桁が残つている。このうら悲しい景もまた、澤の心象だったかもしれない。以下

略。以上は岸本尚毅の俳句時評である。澤好摩という俳人は知らなかつたが、波の句はいい句だと思う。大晦日の海岸べりで初日を待つ作者の姿が想像できる。次の句の春の暮赤し橋桁は赤が夕焼けの赤と橋桁の赤の両方にかかつてゐる。朽廃した橋桁の評は、橋桁を知らぬものの書きぶりだ。防錆剤を塗られた鉄骨の桁が剥げたりして残つてゐるのだ。

芭蕉の軽み以後（118）

光成高志

室の人島に詣けいす。同行曾良が曰いわく、「此神は木この花さくや姫の神と申もうして富士一躰いittai也。無戸室うつむろに入て焼給ふちかひのみ中に、火々出見ほほみのみこと生れ給ひしより室の人島と申。又煙を読習よみならわし侍はべるもこの謂いわれ也」。将はた、このしろといふ魚うおを禁ず。縁起の旨世に伝ふ事も侍はべりし。

おくのほそ道の最初の歌枕の地が室の人島である。先月では栗橋の関所を越えたところまで書いた。その日の泊りは小山市間々田であった。翌日の二十九日（3.29）は陰曆、陽曆に換算すると5.18に小山の屋敷を右に見て、飯塚に向かつて例幣れい使街道を通る道を選んで進んだ。例幣れい使街道とは、東照宮に幣帛へいはくを奉獻するための勅使が通つた道のことを言う。

幣帛へいはくというのは神前にささげる物を指す。もともとは布地を表す言葉で、麻などの織物が貴重品として供えられた。昔からあつた街道ではなく、芭蕉が生まれた頃から京都から幣帛を奉納する勅使例幣使がつか

わされその通つた道をこう呼んで敬うやまつた。誓子先生の八重洲句会に、栃木県から来る遠星集作家がしばしばこの例幣れい使街道を使つた句が出て来て私は辟易した覚えがある。曾良日記では小山から喜沢、飯塚、鹿沼、壬生に至る道がこの旧日光例幣れい使街道であるが、芭蕉・曾良はこの道を進んだのである。

私はこの辺は歩いたことはないが、会社の友達が駒込から日光まで歩いた紀行文を送つてくれたことがあつた。絢子さんから頂いた『関東の芭蕉』（昭和41）には詳しく述べてある。小山から思川という川に沿つて北上すると惣社河岸に出て、室の人島が遠望され、上河岸、河岸、下河岸の三つの地名も残つてゐるとか。上河岸から乾（北西）の方約五丁（約109m）ばかりの森の中に室の人島があつて、現在の栃木市惣社町にある大神神社、一名歌枕で有名な室の人島である。曾良の随行日記の記事と一致すると書かれてある。「室の人島に詣けいす」とある。今日では室の人島という地名はあまり知られていないが芭蕉の頃は古来より有名な歌枕の地であった。その縁起については多種多様であつた。だからこそ芭蕉は敢えて自説は述べず、曾良の言説の引用にとどめ、さらに末尾には「縁起の旨世に伝ふ事も侍し」と書いて、留保されたのであろうか（栗田勇著芭蕉下）。同書ではその縁起を詳しく紹介し

ては思ありとも知らずべき室の八島のけぶりならでは一
藤原實方。（古今和歌六帖三）下野や室の八島に立つ煙
思ひありとも今日こそは知れ。ともに恋の思いをこめ
て下野国の歌枕として室の八島を詠んだ歌である。平
安時代の源俊頼（としより）、平治の乱で流された信西（しんぜ
い）の息藤原成範（しげのり）、藤原定家の室の八島を詠んだ
歌（省略）もある。当時の歌学書には「むろのやしま
とは、下野国の野中に島あり。俗には、むろのや島と
ぞ云いふ。むろは所名歟か。其野中に清水の出る氣の立
が、煙に似たる也。是は能因が坤元儀（こんげんぎ）に見えた
り」とある。坤元儀というのは能因のういんに関連する
地名の歌枕のことである。江戸時代の林羅山、貝原益
軒等の詩には室の八島大明神の傍の地としている。元
禄元年（一六八八）稿の『下野風土記』には次の記事
がある。「予此所に至り見るに、八島の明神とて大社
あり。社の右に八島と云所あり。島ハツ有て、島ごと
にほこらあり。古にしへは清水湧て煙り立しといゑど
も、今は水かれて、所々に庭たずみの如くのこりて、
けむり立事なし」

右の云う事は、室は所の名、八島と云うのは、煙の
立つてゐる所、だから八島は元来竈（かまど）の事である。

その古名である。室と云うのは、山に囲まれた入江や
谷の小盆地を示す。曾良による室の八島についての縁
起に帰ると、この神は木花開耶姫の神と言つて、富士
の浅間神社と一体でござります。この神が出入り口を
塞いだ産室に入つて、身を焼いて誓われたそのさ中に
火々出現尊（ほほでみのみこと）がお生まれになつたので、室の
八島と申します。またこの歌枕では煙を詠む約束にな
つてゐるのもそのためです。またこのしろという魚を
食うことを禁ずる社の縁起を、世に伝えてもおります。
後世の研究家の中には、次のような感想を持つた方も
多い。例えは、歌枕巡りを目的とした「奥の細道」の
旅をスタートし、最初の歌枕の地なのに、あまり感動
していないのがよく分る。「室の八島に詣す」だけで
終わり、あとは同行の曾良の蘊蓄を披露しているだけ。
最後は唐突にコノシロという魚の話。たぶん期待ハズ
していいないのがよく分る。「室の八島に詣す」だけで
レだつたのだろう（すさまじきもの、歌枕探訪）のIT記事
など）。しかし紀行には採用されなかつた芭蕉の句が
「曾良書留」に残されている。「糸遊に結つきたる煙
哉」「入りかゝる日も程々に春のくれ」。二句目の句
の原句は「入りかゝる日も糸ゆふの名残かな」である。
今西に沈み行く太陽も「糸ゆふの名残」である。うす
れゆく陽炎に暮れてゆく春の日の哀愁を詠んだもの
だ。「鐘つかぬ里は何をか春の暮」。室の八島では、

入相の鐘も聞こえないのに、何をたよりに、暮れゆく春を惜しむのか。「書留」には「入逢の鐘もきこえず春の暮」と同じような句が並んでいる。この四句とも芭蕉はおくのほそ道にとりいれなかつた。その理由は既に千住での留別吟に於いて惜春の情けを詳しく書いたので、ここではダブるのをさけたのであろうと山本健吉氏は述べている。いずれものびやかで、ゆく季節への愛惜の情にあふれた句である。どこにも室の八島の旧跡に失望した情けはうかがわれない。むしろ、時節とともに侘び寂びてゆく歌枕への愛おしい心が心にしみてくる。夕陽に沈んでゆく風景の中に、芭蕉はむしろ、ありし日の莊厳な室の八島の風光を想い描いていたのかもしれない。

俳文広場

❶ 橋幸夫が9月に逝去しました。「潮来笠」はどんな歌詞だらうと調べ、そういうことかと納得。潮来には行こう行こうと思ひながら行つたことがありません。ただ最近は便利なもので、Googleのストリートビューで隈なく巡つて、潮来のイメージは出来上がつています。ところで、この歌詞に出てくる関宿は、潮来のおよそ100km近くの上流で、利根川が江戸川と分岐するところです。江戸時代房総沖は船の難所だったので、北の物資は銚子から利根川を上つて関宿まで行つて、

関宿からは江戸川を下つて江戸に運んでいたそうですから、関宿は昔は相当栄えていた所なのだろうと想像します。それから、関宿といえば鈴木貫太郎の屋敷跡があることも有名です。ただし鈴木貫太郎については「2.26事件」で軍に襲われ重傷を負うも、命拾いをしたことくらいの知識しかありませんが。どちらにしても、私にしてはここは車で通るだけの地でした。さて、「潮来笠」の三番で、関宿の地名が出てきます。歌は全体でいえば、潮来の伊太郎というやくざ者がいて、一見薄情そうで、風の吹くまま西東の渡り鳥だが、潮来に気を寄せた娘がいて、旅の途中で田笠の紅緒がちらつく。関宿についたときそつと花を利根川に流す。「だつてよ。あの娘川下」潮来笠と歌う。やくざ者の一面をチラッと歌っています。9月に橋幸夫が逝去了したと聞いて、何故か「潮来笠」が気になり、調べもしたのですが、それ以来私の頭の中で、橋幸夫が何度も何度も「潮来笠」を歌います。私は橋幸夫と同世代で、「潮来笠」は私の青春時代ド真ん中の歌なのです。歌詞はよく知らなかつたけれど、吉永小百合と歌つた「いつでも夢を」と共にとても親しみがあります。それにしても、人生の中で沢山の人との別れを経験し、身内の者であつたり親しくしていた人であつたり、とても寂しくなりますが、芸能人の死は、「ああ、あの

人も死んじやつた」程度ですが、橋幸夫の死は、なぜか違う心境です。若い日の仲間が死んだということでしょうか。（10.2 広谷豊史）

②久しぶりに歩いて畠に行つてきました。草取りをして心地よい汗をかきました。ナス、キュウリ、冬瓜等たくさん収穫出来ました。下校見守りを終え車で迎えに来てくれた主人と合流。畠を耕し葉物野菜の苗を植えてくれました。畠の前の土手沿いの彼岸花が色鮮やかに赤く染まり目を楽しましてくれ疲れた体を癒してくれました。30年以上前になるかな？草ぼうぼうの土手に主人が毎年少しづつ植えていき今に至っています。ハクビシンは落花生の周りをほじくり大きな実を食べているようです。われた殻がちらばつていました。網を掛けましたが効果はどうでしようか（10.3朋子）。（私も今年は夏の間は畠に出られなかつた。出たらたちまち熱中症になつて死んじやつてしまつたでしょうね。九月も残暑がすごいので夕方少しづつ草取りにてて10月になつてなんとか終り。畠なんて言うものは草との格闘の場になつています。田圃と空が広いところなので五七五とメモして帰ります。昔祖父が草を刈つて背負籠一杯にして帰り坂の下に置いて、私に担いで上れと言つた晩に死んじやつたのを思い出し、私もそつたのではと何回も思つた。年九千円の借り畠も来年はできるかどうか覚束なくなつてきました（高志）。

③故郷風景 鏡山からの道筋に沿つて海岸の方に降りて行きますと、浜玉町です。浜玉町から、約3キロ近くの松が茂る「虹の松原」の中を通りすぎると右手に唐津城が見えます。唐津と言えば、伊万里焼き、有田焼に次ぐ唐津焼で名が知られています。城下町の昔、遊郭があつた街並みと、黒堀の街並みを詮索しながら進みますと、別名『舞鶴城』唐津城に着きます。唐津城は昭和41年に完成しました。7万石の城です。町中に戻ります、九州3大秋祭り「唐津くんち」の有名な城下町です。近くに住む者、故郷を離れられている人々もこの祭りを皆楽しみに帰省して、同窓会を同時に楽しみにして皆が楽しみます。この祭りのとき、唐津の町に親戚や知人がいれば、みやげに「鯛1匹」を持参したこともありましたが、今はそのような風習はないと聞いております。家々にはその家の奥方が作られ、出された美味しい御馳走が処狭しと、振る舞われます。有名な曳山が「鯛の形」をしました、呉服町の「曳山」（やま）だと思います。全部で12曳山があります。昔は「曳山」が砂浜を競つて走つていましたが、現在は安全を優先して、街中を大勢の人たちが「エイヤー」、「エイヤー」の曳き声が響き渡ります。唐津の街並みを後ろに、海沿いに進みますと半島の先端に着きます。

「七ツ釜」に着きました。福井県で有名な東尋坊にあります玄武岩、海から突き出た岩で、幅が約25センチから40センチの巨大に突き出た岩並です。この岩の中に、玄界灘の荒波に削られた大きな穴が7つあります。「七ツ釜」、近くの呼子町から観光船で穴の中に入り楽しめます。片方、海の穴の上には放牧された牛たちが若葉を矧ぐみ、のんびりとした風景です。呼子町は「イカソーメン」鳥賊の刺身と「朝市」で知られています。朝市には親戚の人たちが、海の幸、サザエ、他魚等を並べておりました。町では春になると、「綱引き」合戦が始まります。綱の太さは約40センチほどありました。太い綱からは細い綱が枝分かれして、皆で引きあいます。浜の人は豊魚・村近くの人々は米の豊作を祈願して綱を引きあいます。呼子を後にするれば、豊臣秀吉が朝鮮征伐に築城した名護屋城があります。当時は自分たちの村々が、豊臣秀吉の陣地にされていました。今も「発掘調査されています」というような物が発掘されるのが楽しみです。暫くぶりに、故郷を楽しみました。帰路は呼子町から、高速バスに乗り、福岡空港から我が故郷を後にします。今後、皆様の故郷を紹介してください。楽しみにしておりまます。（山下寿幸）（手元にある「俳句の旅」全9巻の9は九州・沖縄である。その中の佐賀県はカラーにて句と写真が

載っている。前から寿幸さんが仰っている虹の松原の写真もある。秋の所には唐津くんちの写真もあり、今回の寿幸さんの故郷風景の文章と合わせて見ると合点がいきます。その本に載っている唐津くんちの一句を紹介します。「山車めがけ祭宿より小餅とぶ」（堤劍城）。追伸…10月の朝NHKにて七ツ釜など海中のことが放映された。虹の松原も映った。

④目高の子 いつの間に目高の子が生れていた。庭の日向に置いた陶器鉢の布袋草の根っこより、縮緬雜魚のような目高の子が五六匹出てきた。私の目では屈んで眼鏡を外さなければ見えない。顔を近づけると、水を蹴ってさつと布袋草の中へ逃げる。そつと近づいて見ていると暫くは知らぬ顔して泳いでいる。止まつて居る時は、尾鰭を振動させて鳥のホバリングとそっくりである。餌を水面に撒いてやると、餌の下に来て、餌をつついている。口に大きすぎるらしい。指で餌を擦り、小さくして撒いてやる。すると、確かに餌を口にした。この目高の親は、高砂の鶏肉屋さんから貰つた。金魚水槽に入れて、玄関ドアの外に置いていたが、段々亡くなつて数が減つてきた。これはいけないと、利根町の目をつけていた小川から掬つてきた目高を加えた。それでも死ぬ目高も出てきたので、近所の目高博士の所に飼い方を聞きに行き、陶器鉢に入れ日向に移動したのだ。それから一ヶ月くらいして目高の子が出でました。親目高は消えてしまつたのに。今は親目高の

大きさに近づいた。餌を腹いっぱい食つて、牛の腹のようになつてゐる時もある。両目の白い瞼が二つ並んで、良く目立つようになつた。以上は20年前のことである。今は南面窓の前の60リットルの水槽に沢山の目高が泳いでいる。皆、目高博士と言つても家の庭に大きな水槽を幾つも並べて目高を飼つて増やしITを通して売つてゐる玄人なのだが、そこで買つたり、病院の売店の前で売つてゐるのを飼つて来て知らぬ間に増えたものだ。目高とてわかるのか、餌を撒きに近寄ると角に寄つてくる。本誌を編集する真ん前なので、今は璃子さんのはつぽちゃんに倣つて、めーちゃんメーちゃんと呼んで餌をやる（高志）。

⑤ 蟻螂を飼う 八月も終わる頃、畑で蟻螂をみつけた。大きさに驚いた。前兆15センチもあろうか、単身の蟻螂を買ひ物籠に入れて持ち帰つた鉢虫を飼つていた飼育箱を住処とさせる。衝動的に飼うことにしてので準備ができていな。何を食べるのか、住処の環境の知識もない。子ども用の本によると小さな昆虫を主食とするらしい。蜥蜴、蜂、蝶が頭に浮かんだがどれも私は捕獲は無理なようだ。第一それをかりかり食べている蟻螂の姿を見るのは嫌である。差し当つて青草を入れて霧吹で水分を与えた。一週間して蟻螂の様子が少しづかつた。高いところが好きなようでしかもい

つも南側の蓋の天井に逆さにしがみついている。ふとした思いつきで台所の炒子を一尾投げてやつてみた。二三日すると観念したのか炒子の頭を齧つている。やはり動物性食物が好きなのだ。翌日も翌々日もせいいしして突けば動く蟻螂をみてこの辺が生死の境界のように感じて夕方捕えた畑へ放してやつた。三角の頭を左右に動かして私を見ている。「監禁してご免なさい」、秋冷を感じる夕べの別れであった。（光みち）（私らの俳句の師は山口誓子であった。誓子先生の蟻螂の句に影響されてこの文が成つたのだと思う。誓子全句集の二ページにわたつて蟻螂の句が載つてある。中でも「かりかりと蟻螂蜂の兎かほを食む」（凍港昭7）は有名。）

⑥ 九月のひとりごと 今年の夏は過去にない程の酷暑となりました。九月に入つても三十五～六度の気温となると外に出るのも覚悟が必要です。庭や畑の様子が気になるが、日中はとても作業する気になれません。トマトは早々に実を付けなくなり夕方か早朝に水やりを頑張るが追いつかない。庭のさつきの大きな枝の一部が枯れてきた。亡き夫が大切にしてきた木だけに心が痛む。特別にしつかり水を撒くが追いつかなくて焦る。木が水を欲しがつていると自分の喉がひどく乾いているかのように思えてくる。樹木がかわいそうで夜休んでいても気になつて寝付けない。今まで見て見ぬ振りをしてきたが、畑の草も伸び放題でこちら

も不眠の原因になる。放つておけない！やるしかないと
い！しかし今年もとれたての新鮮な野菜をそこそこ堪
能したなあ。好きな胡瓜漬けも食べられた。孫も美味
しそうに食べててくれた。この味が忘れられず又来年も
せつせと苗を植え肥料をまき支柱を組み楽しみながら
育てゝいることだろうな。毎年この繰返しです。（廣
本幸恵）

お便り広場

光成様いつもありがとうございます。「白金霞」^{167号}25
部をお納めいたします。心落ち着けて俳句を詠むような状
況になくでも好きなら詠むだらうから好きじゃないのかも
などと思つてゐる次第です。次号もよろしくお願ひ致しま
す。みち様によろしくお伝えください（²²木戸敦子）（敦
子さんに一言アドバイス。私なんかサラリーマン時代多忙な仕事の
中通勤途中出張時など空白な時間が必ずあるものですから、さあー
作るよと気合を入れて思い出すまま⁵⁷⁵とメモしました。今はその時
代は終わりそれで暇かと云ふと逆に多忙です。だから毎日々々メモ
しています。季語は無限です。それに会うだけでもうれしい。敦子さ
ん！仕事の中にも句材はありますよ。これ以上書きません高志）

光成高志様 敏子様 白金霞9月号をお送りくださり有り
難うございました。今年の夏は暑さが格別でした。九月い
っぱい残暑が続き午後からさらさら状態になりひたすら横
になつていきました。二度の食事はきちんと食べられるので
不思議な気持ちでした。十月に入つてようやく残暑から解

放されたおもいです。（中抜き俳文広場）二人とも市と区
の文化祭の準備に追われています。私は折り紙とパッチワ
ークの二刀流です。お体に気をつけて俳句作りを楽しんで
下さい。追伸・領収書有難うございました（¹⁰朋子）。おはよう
ございます。猛暑の日々からやつと秋を感じる頃になります
した10月の投句いたします。宜しくお願ひいたします（^{10.13}
正美）。少し秋らしくなつて来ました。身体の調子が良くな
るので毎日ゆつくりしていきます。伸明が良く気を使つてくれ
るので助け合いながら感謝で暮らしています。近所で栗
をもらつたので考えてみました。「やつと来た私の出番栗
おどる」「西の空一日終りあかね雲」。白金霞ありがとうございます。
むずかしいけど読めば心の糧になります。これからもいっ
ぱい心を開き元氣で自分の人生を生きたいと思
います。身体に十分気をつけて敏子さんと一人でがんばつ
て下さいませ。乱筆にて（¹⁴幸子）。朝夕はかなり秋らし
くなつて参りました。まだ残暑が続いています。九月
号の紙面から光成さんのパワーを頂きお元気でお過ごしの
こと安心いたしました。私も何とかこの猛暑乗り越えら
れたように思います。九月号をお送り頂きありがとうございます。
白金霞の誌の会員（誌友）に受け入れて下さ
り拙い文を載せて頂き、感動と感謝で一杯です。どうぞよ
ろしくお願ひ致します。年令のせいか文の説明が多く、無
駄な言い回しなど長文になつてしまい、言葉を選ばなけれ

ばと自分でも気付いています。色々教授下さい。よろしくお願ひ致します。光成高志様 光みち様（10.14 幸恵）。いつも白金葭を送り頂きありがとうございます。10月の句会に下記の通り投稿させてもらいます。宜しくお願ひ致します（10.10 寿幸）。おはようございます。猛暑の日々からやつと秋を感じる頃になりました10月の投句いたします。宜しくお願ひいたします（10.13 正美）。

我孫子日記

9/19	句会
9/22	古谷野皮膚科
10/3	駅前ク(内科)
10/5	* 向島百花園
10/8	ランチ会
10/10	*2 花の丘Dゾーン
10/17	句会

- *赤南瓜天井棚にぶら下る
破芭蕉茶筅塚の碑堂々と（みち）
棚に垂る瓢箪大事紐で吊る（リ）
大鉢の鉈豆の蔓どこまでも
泰山木薺の立つて紅ほのか
梅擬赤き小さき実の目立つ
縞芒大きく撓み赤穂立ち
萩トンネル入れば涼しきうねりかな
萩しだれ振袖となり地を撫でる（みち）
塀の外との高き青芭蕉やれ芭蕉
錦木の紅葉始まる一二枚（みち）
向こふから萩の花びら流れくる（リ）

萩の花水あり。ピンクの花筏
白萩に赤萩交じり咲きゐたり
吾亦紅足元にあり今気づく
*2 香るなり金木屋を一周す

金木屋大木なれば匂ひ壺（みち）
杜の道歩けばどんと柵くぬぎ落つ

秋澄むやどんぐり一つ落つる音（みち）

团栗の橡くぬぎの帽子立派なり（リ）

川鵜のコロニー池の樹木を白くせる

編集後記

俳文6人、投句5人、どちらも文芸として面白い。人数も丁度良い。来年の15周年記念号の草稿が近づいてきました。その時はまたお知らせしますのでご協力を願い致します。

白金葭 10月号（通巻168号）誌代一部千五百円（年会費一万五千円）郵便振込口座一〇五二〇一四二二三六一（名義シロガネヨシ令和七年9月21日発行編集発行人光成高志発行所〒270-1119 我孫子市南新木2-14-17 光成方 投句先メール又はライン印刷製本・喜怒哀楽書房〒950-0801 新潟市東区津島屋七二九。表紙の題字は嘉悦羊三&9.14の白金葭&コンバイン&風船葛&曼殊沙華&璃子さんの句集「穴まどひ」よりの選句